

# 前置詞を使った空間表現

—“over”と“above”—

谷 澤 悠

## 1. 問題提起

### 1.1. 空間表現としての over と above

英語を使っている時に前置詞の使い分けに迷いが生じる場合がある。その大きな要因として、ひとつひとつの前置詞がどこまで範囲をカバーできるのかという問題がある。本論文では特に“over”と“above”の使い分けの基準を考察する。

前置詞は、日下部 (1956) などが指摘しているとおり、位置関係に限らず「時間」, 「水準」, 「質」, 「権威」, 「数量」など様々な関係・状況を表す場面で用いられるが, Quirk et al. (1985) は, 「前置詞とは位置関係を指す意味が根本として存在しており, そこから抽象的に意味が拡張し時間や数量などを表現するために用いられる」と述べ, 前置詞の基本的な意味と, そこから拡張した意味を明確に区分して分析を行っている。本論文では, この「位置関係の表現」という使命が前置詞の根底にある以上, あくまでも位置関係に的を絞って前置詞の間の差異を見つけることに大きな意義があると考え, 前置詞の空間表現にのみ焦点を当てる。よって, 以下に示す例の前置詞の意味の範囲は取り扱わない。

(1) It doesn't all disappear over night.

(一晩で全てなくなることはないだろう。) → 時間軸上を移動

My father is far above me in pooling.

(父は私よりビリヤードがはるかに上手だ。) → 能力が基準を超える

以下, 先行研究の知見, 観察とコーパスからの新たなデータの分析に基づき, “over”と“above”の本質的な相違は, その位置が表現されている対象の広がりの有無にあることを提案する。

コーパスからは, “over”と“above”が用いられている例を抽出し, 高さ以外のなんらかの水準や時間などへの意味の拡張の例を除外し, 物理的状況を表現している例文だ

けを扱った。先行研究に倣って図示する方法も分かりやすいが、逆に図示することによって更に曖昧になる部分が発生するため採用しなかった。

## 1.2. 経路の意味の有無

まず、前置詞が名詞句を伴わずに現れる例を見よう。丸田・平田 (2001) は、He went inside.のように名詞句を伴わずに前置詞のみでその前置詞句を完結させることができる前置詞の役割を自動的役割と呼んでいる。以下の例が示すように、“over”はその後に名詞句が無くても成立し、自動的役割を持つといえる。

- (2) She goes over (the territories).

(彼女はその縄張りを横切る。)

Then a big wave came over (the turtle).

(すると大きな波がその亀の上に押し寄せてきた。)

これらの例では、“over”は移動の経路を示している。一方、“above”が名詞句を伴わずに現れる場合は、“See above.”のように、移動の経路ではなく基準となる地点よりも上の場所を表す。

名詞句が後続する場合でも、“over”には移動の経路あるいは抽象的な移動の移動先を表すことができるのに対し、“above”にはできない。

- (3) the bird over the bridge

(橋の上空にいる鳥、橋の対岸にいる鳥)

the bird above the bridge

(「橋の上空にいる鳥」「橋の対岸にいる鳥」という意味は持てない)

- (4) He glared at her over his beer.

(彼はビール越しに彼女をにらみつけた。)

\* He glared at her above his beer.

(「彼はビール越しに彼女をにらみつけた」という意味はなく、彼または彼女がビールの上にいたという不自然な解釈しかない)

これらの例は、移動の経路の意味を持つか否かについて2つの語の間に差異があること

を示している。

### 1.3. 2つの問い

前節では、基本的な位置関係に関する意味からの拡張として「移動の経路」の意味があるかどうかについて“over”と“above”に違いがあることをみた。それでは、移動経路の意味の有無以外にも“over”と“above”に違いはあるのだろうか。そして、そもそもなぜ移動経路の意味の有無に違いが出てくるのだろうか。本論は、この2つの問いに答えることを目指す。

## 2. “over”と“above”

### 2.1. 先行研究

Quirk et al. (1985) は、前後上下を表す前置詞を“relative position”と呼び、to や at などの simple position とは質が異なると主張している。“over”や“above”, “before”, “after”などの relative position に関しては、この「何かと何かを比べる」前置詞そのものの性質がそれらの本質を言い表す困難さに関与しているように思われる。後述のように、前後上下を表現する前置詞には simple prepositions とは異なる形で次元(dimension)の考えが大きく関わっており、前置詞をくくりで論じるわけにはいかない。

“over”と“above”の差に関しては、しばしば接触しているかどうかが問題とされている。しかしそれは“on”と“over”“above”の決定的な違いであって、“over”と“above”の違いではない。“on”は必ず対象が基準に接していなければならないのに対して、“over”と“above”にはその点に関しての制約は無い。接触・非接触が、“over”と“above”を使い分ける決定的な要素ではないという事実は以下の例によっても確認できる。

- (5) They built a new room above/over the garage.

(彼らは車庫の上に新しい部屋を建てた。)

My bedroom is directly above/over the living room.

(私の寝室は居間のちょうど真上だ。)

次の(6)でも“over”と“above”の両方が可能である。しかし、想像されるガレージや部屋の位置・大きさが異なるように思われる。

- (6) the room above the garage  
the room over the garage

小西（1976）は、2つの前置詞の意味を次のように説明している。

above は単にあるものより他のものが高い位置を示すのに対し、over はあるものが他のものの真上にあることを示す。この関係を次のように例示することができよう。

A is above B = A is higher than B

A is over B = A is directly above B (小西 1976, p139)

つまり、“over”を文に使用した場合、garage が一階にあれば the room はその真上にあり、同じ面積を共有することを暗示する。一方“above”では、the room は二階にあるのだがその位置について特に指定はしない。真上に存在していても良いし、その軸が水平方向にずれていてもかまわない。さらに彼は“over”について、“over”の意味は“under”の意味と反対でその原義は‘above+covering’で、始めは「広がり」を持った上方を意味し、それより意味が広げられ、上から（または上を）覆う形となったのだと述べている。

小西のこの示唆に基づき、本論は前置詞について以下のように定義し検証を進める。なお、以下の「基準」と「対象」はそれぞれスキーマ別の概念では LM, TR（白谷 2006）と呼ばれているものである。「A is over (above) B」という文では、A の位置は B を基準として説明されているので、A を「対象」とし、B を「基準」と呼ぶ。

#### (7) 前置詞の意味

on 直線内または平面内に対象 (figure) が存在

above 垂直線の基準 (ground) より上に対象 (figure) が存在

over 垂直線上の基準 (ground) より上に対象 (figure) が広がりを持って存在

## 2.2. 広がりの有無

次に示す例は“over”しか使用し得ない典型的な例である。

- (8) I got wounds all over my body.

(私は体中に傷を負った。)

All of their shampoos can be used as an all over body wash.

(彼らのシャンプーはいずれも体全体を洗うものとして使える。)

ここで使われている“over”は「～中(全て)」という意味を持っているが、これはこの前置詞のもつ基本的な意味から拡張して使われているからである。ここで「～中(全て)」という意味を持てるのも、対象が基準を多い尽くすほどの広範囲にわたっているからである。“over”の基本的な意味に「広がりを持って存在」という定義が無ければ、このような意味の広がりも無かったはずである。“above”の基本的な意味には「広がりを持って存在」という条件がないので、「～中(全て)」に意味を広げることもできない。

接触するか否かが問題なのではないと先に述べたが、それでも接触が想定される状況により“over”が好まれるケースが以下のように存在する。以下に使われている“over”を“above”に替えることはできない。“over”が基準と対象の広がりに関係に焦点を当てているのに対し、“above”は基準と対象が表す点と点の関係に重点を当てているためである。

(9) He slung the twin cartridge belts over his shoulders.

(彼は二つの弾薬包が付いたベルトを自分の肩にかけた。)

He spreads an old blanket over it.

(彼は古い毛布をその上に拡げる。)

次に示す例も同じく衣服や身体に「接する」場面で交替ができない例である。以下の(10)の最初の文では、“over”を“above”にしてしまうと「覆う」という意味がなくなってしまう、ただ単に口の上で手を組んでいることになる。“above”を入れても非文にはならないが、伝えたい文の意味は変化する。ここで“over”が選ばれる理由は、覆っている対象が基準点よりも広い面積を持っているからである。以下の例文で基準となるものは対象によってすっぽりと覆われている。

(10) He was holding both hands clamped over his mouth.

(彼は自分の口を両手で覆っていた。)

The snow came up over our knees.

(雪は私たちの膝の上まで積もった。)

関連することを、小西 (1976) が以下の例を挙げて指摘している。

- (11) a. He held up his hands above his head.  
b. He held up his hands over his head.

“above”が使われていると両方の手を垂直に伸ばしただけの姿勢を意味するが、“over”では頭上で手を組み合わせた姿勢を意味する。小西 (1976) は、「“over”は“above”と比較してあるものが他のものの真上にあることを示す」と述べている。“over”は、対象が基準に対して広がりを持つことを要求するために、頭上で手を組み合わせることによって対象である手が基準である頭よりも広い範囲を持つ状況を表し、その結果、対象が基準の真上にあるという解釈が導かれると考えることができる。“above”は決して真上に来てはいけないというのではなく、必ずしも真上にある必要はないということであろう。

それでは、“above”はどのような意味を持っていると考えられるだろうか。“over”と“above”の違いが判別しにくく感じられるのは、対象と基準の関係を側面から見ているためである。例えば、(11)の2つの例が表す状況を真上から見た場合、“over”を使わなければ his head が隠れないのであって、これは“above”を使う時との明らかな差である。つまり、対象が広がりを持たなくても良い場合や、対象に故意に広がりを持たせたくない、あるいは対象が広がりを持たない点として見なしたい場合には、“above”が好んで使われると考えられる。コーバスからは次の例が見つかった。

- (12) ..., stretch your arms above your head, and then let them fall loosely to your sides.

(腕を頭の上で(組まずに)伸ばして、それからだらりと体の横に下ろして下さい。)

以下の例からは対象と基準にわざと広がりを持たせないことによって、位置関係を正確に示したいという意図を感じることができる。

- (13) Use the navigation bar above the ads to find the link you are looking for.

(お探しのリンク先を見つけるためには、広告の上にあるナビゲーションバーを使ってください。)

The route passes beneath the giant tower on the raised roadway section above the Docks.

(その道は港の上の高架道路にある巨大な塔の下を通る。)

ここにこそ、今まで挙げた例とは逆に“above”にしか担えない役割が存在する。例えば「海拔」や「海面からの高さ」を説明したい場合には above sea level という表現を使う。ここで over sea level と言うことはできない。高さを測るというのは、基準と対象それぞれに一点を定めその間の距離を数値化することだ。これは先ほど述べたように、対象に広がりを持たせない点で共通している。この発想は、「“above”は“over”よりもさらに明確に高さを表現することができる」という性質に結びつく。

- (14) Broadway Tower rises 1,000ft above sea level.

(ブロードウェイタワーは海拔1,000フィートの高さに聳え立っている。)

Above me, a strange moon, white as snow, waned behind purple clouds.

(私の頭上には、雪のように白い奇妙な月が、紫がかった雲の背後に欠け始めていた。)

ただ単に高さを表現したい時や、位置関係を強調する場合に“above”が好んで使われる。一方、対象が広がりを持つものと捉えられていたり、移動動詞と共に使われていたりするならば、そこでは“over”が使われるべきである。“over”の方が網羅できる範囲が広いので、“over”が担える役割は全て“over”が担うが、“over”でも“above”でもどちらでも良い場合にも“over”が好んで使われる。しかし、先述したように高さの強調や具体的な数値を持った高さを述べる場合には“above”にしかその働きはできない。

ここにもそれぞれの前置詞の存在意義を見つけることができる。関連して、何らかの基準よりも上なのか下なのかという厳密な意味を知りたい時も“above”が用いられるようだ。これには、Quirk et al. (1985) が at, on, in などの分析に用いている「次元」という考え方が大きく関わる。何かの高さを知りたい時に、私たちはその対象が持つ幅などは気にしない。例えその対象が幅を持っていたとしても、どこかに一点を定める。こ

こで基準と対象を影絵のように地上に投射してみると，“above”が使われている場合は、真上から観察するとこの点に広がりを確認することはできない。“over”も真横から観察した場合にはさほど“above”との差は無いが、地面に投射してみるとその広がりのために文中では“over”しか使われ得ないのだと確認することができる。

- (15) He was swimming vigorously across from a little island, his round face and bright eyes showing above the water.

（彼は丸っこい顔やきらきらした目を水面より上に出して、小さな島から勢いよく泳いでいくところだった。）

A percentage of rabbits stay above ground during daylight.

（一部のウサギは昼間の時間帯を地上で過ごす。）

(15)の場合も、彼の顔が水中にあるのか水面上にあるのか、ウサギが地上にいるのか地中にいるのかという点に重きがおかれているので“above”が選択されたといってよいだろう。

- (16) He lifted his bat above his head.

（彼はバットを自分の頭上に持ち上げた。）

ここでも単に位置的な上下関係を表す表現として“above”が使われている。

- (17) The shining weapon flashed above her.

（その光沢のある兵器が彼女の頭上でパッと閃光を放った。）

この文に現れる flash という動詞は、瞬間の出来事を表すものである。ここに“above”という前置詞を用いることによって、空間的にも時間的にもかなり限られた範囲の中で起こった事象であることが印象付けられる。

動詞との関係から言えば、コーパスの中では“above”は動詞 build と多く共起した。build という動作動詞には「～に」や「…で」という前置詞句が多くの場合必要となる。

「～に」と場所を述べ、なおかつ位置関係の上方を表現したい場合には“above”が用いられるようだ。一方、これが状態動詞で、「～の上に建っている」という時は“over”と



“above” のどちらも用いられる。

- (18) Parking is on the fourth floor above a shopping mall.

(駐車場はショッピングモールの上の四階にあります。)

The farm lies on the hills above Coniston Lake.

(その農場はコニストン湖よりも高いところにある丘に広がっている。)

- (19) There is a beautiful picture on the wall above a fireplace.

(暖炉の上の壁に一枚の美しい絵がかかっている。)

He stared blankly at the wall above the phone table.

(彼は電話台の上の壁をぼんやりと見つめた。)

上に挙げた文は“over”と“above”を比較しやすい例である。なぜなら、これは一見するとどちらが使われても良い判断に困るものだからだ。だがここにははっきりと使い分けのヒントが隠されている。例えば最後の文の電話台と壁を真上から見た状況を考えてみれば、壁は台を覆う広がりを持つことができない。“over”も“above”も対象が基準より上にはあるのだが、広がりを持っているか否かによっていずれかが選択されている。

## 2.2. 中間経路の解釈の有無—up との関係

先に述べたように、“over”は移動の中間経路あるいは移動先を表すことができる。

- (20) He was flying high over the sky.

(彼は上空の高いところを飛んでいた。)

Collision over Hudson interrupts idyllic day.

(ハドソン湾上空での衝突は穏やかな一日を脅かした。)

- (21) I jumped over the wall.

(私は壁の向こうへ跳んだ。)

Why don't you all move over here where you'll be more comfortable?

(より快適に暮らせるようにここに引っ越してきたらどう?)

Quirk et al.(1985)も、“over”について基本的な意味とは別に章を立てて、throughout や with などという前置詞と共に pervasive meaning を持つと述べている。Pervasive と

は、「広がる」「網羅する」などという意味を持つ語である。つまり、これは経路表現の一面を指している。また他の章では、同じ“over”に関して duration と表現して for や during, through と比較している。これは時間的継続の側面である。上記の例のように、“over”が移動動詞・移動様態動詞と結びつくことによって移動の経路を示すことができるのも、“over”自身が基本的な意味として広がりを持っているからだと考えることができる。

“over”は中間経路表現の働きも持っているため、動詞とのつながりが強い場合がある。例えば、pass という移動動詞は“over”とは共起しやすいが、“above”と使われることはほとんどない。“over”は pass と共起することで、広がり両端に想定される点から点までの移動を表すことができる。同様に、roll に代表されるような移動様態動詞も、使う前置詞によって文の意味が変わってくる。Roll over といえは転がりながら移動することを意味するが、roll above といえはどこか一定の地点の上でその対象自体がくると回転する様を表す。

- (22) The cat rolls over the carpet.

(猫がカーペットの上を転がりながら移動する。)

The cat rolls above the carpet.

(猫がカーペットの上(上空)で回転する。)

状態動詞と共起する場合、“over”は「～を超えて」という抽象的な移動の経路を表すことができる。

- (23) The windows to either side had been thrown wide as well, and the ends of the tattered old curtains had blown out to hang over the sills.

(…、そしてぼろぼろになった古いカーテンの端は風に吹かれて窓敷居の外に出ていた。)

When a wall is positioned right on the boundary, rainwater pipes, guttering, and even the fascia board, are likely to project over the boundary.

(壁が境界線上にあるときは、たいてい排雨溝や雨樋、柱の幕面さえもが境界線を超えてしまう。)

以上のように“over”が経路を表すとき、その経路は「“over”の要求する広がり的一端から反対まで」と解釈される。“above”が対象に広がりをも想定しないとすれば、このような経路も想定することはできない。“above”は、基準よりも高い位置にあることを要求するので、その点を通る線を想定することは可能だが、その線を経路とする場合はもうひとつの前置詞“up”によって表現される。“above”に経路の意味がないのは、このように拡張によって表せる経路として、水平方向のものは“above”が広がりを含まないために用いられず、上方に向かう経路はそれに専用の前置詞“up”が優先されるためである。

このことは、川の上流・下流を表す際にも当てはまる。例えば、「利根川の二十キロ上流」としては、“above”よりも“up”の方が好まれる。

- (24) a. twenty kilometers above the Tone River  
b. twenty kilometers up the river

ここには、上流のある一点までを up を使って移動するという意味がこめられている。

### 3. 「下」を表す前置詞との比較

以上の考察を念頭に、「下」を表す前置詞“under”と“below”についても考えてみよう。“above”や“below”は、基準に対して対象が物理的な幅を持っていないとよいう意味で用法は一致している。しかし、“under”に関しては、“over”とは異なる特徴も観察される。

次の例では、「下のエレベーター」は「ここ」の真下にあるのではなく、基準と対象は水平方向にずれていると思われる。

- (25) I will jump from here to the elevator below.  
(私は下にあるエレベーターにここから飛び降りる。)

“above”の場合と同じように、“below”が高さの違いのみを表す例である。

“over”と同様、移動動詞や移動様態動詞と共起する“under”は、移動の経路を表す表現となり得る。“under”は状態動詞とも自然に組み合わせることができる。これに対して“below”は、位置を表す性質が強いため移動動詞とは共起し難く、状態動詞とは相

性が良い。次の例のように状態動詞が使われた文では、両者の違いは明確には現れてこない。

(26) I stay below the bridge. (私は橋の下で待機する。)

I stay under the bridge. (私は橋の下で待機する。)

次の例の“under”は、立てかけてあるはしごの一方の側から反対の側への水平方向の移動経路を表し、ある程度の広がりが見込まれていると考えることができる。

(27) Some people think it's unlucky to walk under a ladder.

(はしごの下を歩くのは不吉だと考える人もいる。)

これに対して、次の例では橋の端から端まで走るのではない解釈も可能である。

(28) I run under the bridge. (私は橋の下で走る。)

(私は橋の下へ走る。)

(私は橋の下を走(りぬけ)る。)

この例は、“over”の場合は対象が基準に比べて広がりを持っていることが想像し易いが、“under”では基準の方が対象よりも広がりを持っている方が想像し易い場合があることを示している。

#### 4. 結論

本論文では、“over”と“above”の差異を決定する意味要素を探り、移動の経路の意味の有無よりも、対象が「広がりを持って存在するか否か」という小西(1976)の指摘する特徴がこの二語の差異を決定付けていることを示した。“over”を使用した際に基準や対象の大きさや面積の制約が“above”よりも強いのもこのためである。基準点と対象の関係を側面から観察した場合に、“over”と“above”に差はそれほど現れない。しかし、一度視点をそれらの上空に移して観察した場合、“over”は対象に広がりを持つが“above”はそれを持たないことがわかる。

かつて目下部(1956)は、“above”について「しばしば on, upon, over などと交代し

得るが、これらの前置詞のどれよりも意味が広く、それだけにまたどれよりも明確でない」と述べた。“on”は対象と基準が接していなくてはならないという大きな制約が前提にあり、更に“over”は今まで述べてきたように広がりを持っていなければならないということから、対象に限らず基準にも自動的に制約を加えるということになる。以上のことから、“above”は広がりを持つたないので、いわば縦横無尽に点を定めることができ、基準の広がりにも制約を加えないので「どれよりも意味が広い」と日下部(1956)は述べたのであろう。

本論文ではさらに、この“over”と“above”の本質的な特徴と、移動の経路の意味の有無との関係、「下」を表す前置詞との比較を論じた。“over”と“above”に移動経路の有無の差異が現れたのは、広がり的一端から反対側的一端までという経路が“over”には想定できるが“above”には想定できず、“above”が当てはまる高位置の点を通る経路を表す場合には up が積極的にこの役割を担うからである。「下」を表す前置詞“below”は“above”と同様広がりを持たない一方、“under”には“over”とは異なる特徴も観察された。

本論文は“over”と“above”の使い分けの明確な基準が知りたいという目的で書かれた。そして、その中でもこれら前置詞の持つ「基本的な意味」に焦点を当てた。前後を表す前置詞についても同じ考えをあてはめることが可能かどうかとも関連する問題である。

#### 参考文献

- 上野義和 (1984) 「移動の方向を示す前置詞及び前置詞の副詞—*toward* v.s. *down*, *up*—」『大阪  
外大英米研究』14巻 pp.125-135 大阪外国語大学
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 日下部徳次 (1956) 『英文法シリーズ<第18巻>前置詞 (上)』研究社出版
- 小西友七 (1955) 『英文法シリーズ<第19巻>前置詞 (下)』研究社出版
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』大修館書店
- 白谷敦彦 (2006) 「Under, below, beneath の違い」『福岡大学人文論叢』38巻第1号 pp.47-68  
福岡大学
- 松本曜 (1997) 「英語前置詞による「到達経路表現」—認知言語学的視点から—」『英語青年：the  
rising generation』142巻12号 pp.661-663
- 丸田忠雄・平田一郎 (2001) 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』研究社出版

- Clark, Eve V. (1971). On the Acquisition of the Meaning of *Before* and *After*. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 10, pp.266-275.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

#### 参考資料

BNC Simple Search (<http://sara.natcorp.ox.ac.uk/lookup.html>) 2009/12/10アクセス

#### ABSTRACT

This article discusses the meaning of the prepositions “over” and “above” and attempts to clarify the crucial difference between them. These two prepositions have the common meaning of expressing the vertical relation between two objects: figure and ground. However, a clear difference is found when the horizontal relation between the two objects is taken into consideration.

The word “over” requires that the figure should have an extension that covers the ground so that the ground is within the range of the figure. “Above,” on the other hand, does not have such a requirement so that the two objects can be regarded as two points which may or may not share the vertical axis. The observation that “over” can signal the path of motion while “above” cannot is accounted for by the above-mentioned difference on the extension of the figure and the fact that vertical upward paths can be expressed by another preposition “up.”